柿

土田耕平

青空文庫

私の村は「柿の木の村」でした。家といふ家のまはりには、大きな小さな柿の木が、立ち並んでゐました。

夏は、村ぢゆうが深い青葉につゝまれ、秋はあざやかな紅葉に染りました。紅葉がちつてうつくしく色づいた実が、玉をつづつてゐるのを見るのは、どんなにたのしかつたでせう。

私の家の庭には、大きな柿の木が幾本もありましたので、家内だけで食べつくすわけにはいきません。山浦のお百姓さんが、稲のとりいれがすんだ時分に、馬をひいて、買ひにきました。

「こんちは、今年もきたぜ。」

山浦のお百姓さんは、ふとい声で、あいさつして、庭の柴戸口から入つてきました。

「どう〳〵。」

といひながら、馬を戸口につないでおいて、縁がはへきて腰をかけました。なた豆煙管でたばこをすぱ〳〵ふかしながら、おばあさんやお母さんと、一年ぶりのあいさつをするお百姓さんの姿を、私はわきの方から見てゐました。

同じお百姓さんでも、山浦といへば、大きな山の裾野の、本場のお百姓さんですから、私の村のお百姓さんたちにくらべると、姿かたちから、言葉つきまで、がつしりした力が感じられました。幼い私には、それが、何だかこはいやうな、親みにくいやうなものに、おもはれたものでした。

そんな大男が、腰にビクをゆはひつけて、する〳〵と身がるく、高い木のてつぺんまで一息に、登つてゆくのには、私はびつくりしました。山浦には、猿が住んでゐるといふから、それで木登りが上手なのだらう、などとおもひながら、見あげてゐますうちに、一枝々々と、赤い実を持つてたわんでゐたのが、ほつそりと尖つた枝ばかりになります。柿はみんなお百姓さんのビクの中へ入つて行きました。

お昼どきになりますと、お百姓さんは、木からおりてきて、縁がはへ腰かけました。おばあさんの入れてあげるお茶は、うまさうにして飲みましたが、御膳には箸をつけませんでした。

「いんえ、ここにあるだ。」

かう云つて、ふろしき包みをひろげたのを見ますと、お百姓さんの顔ほどもある、大きなおにぎりが出てきました。私はふしぎさうにして、お百姓さんがおにぎりを食べるのを、わきに立つて見てゐますと、

「こりや、お前さまの孫つこかえ。」

と言ひました。おばあさんが笑ひながら、

「いゝえ、どこの子か知らない子だよ。」

と言ひますと、

「ぢや、帰りにもらつて行くべ。馬に乗つけて――」

「あゝ柿と一しよに買つて行つておくれ。」

私は、お百姓さんが、何と言つて返事するかと思つてゐますと、

「お前さま、ことしは柿のなりがひどくいゝぜ。」

とまるで、別の返事をしました。

お百姓さんは、昼ごはんをすますと、また柿もぎにとりかかりました。夕方柿の一ぱい入つたカマスを、馬の背につけてかへるとき、お百姓さんは、

「また、あした来るぜ。」

と言つて柴戸口を出て行きました。つぎの日には、

「また来年くるぜ。」

と言ひました。私はおばあさんと一しよに、村みちのまがり角に立つて、お百姓さんと馬のすがたが、むかうの森にかくれてしまふまで見送りました。

「おばあさん、来年つて遠いの？」

私はたづねました。

「あゝ遠いよ。」

とおばあさんはおつしやいました。

「遠い来年」がつもりつもつて、私の村には、今ははや、馬をひいて柿を買ひに来るお百姓さんの姿も、見られなくなつたさうです。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「夕焼」古今書院
　　1932（昭和7）年5月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2011年7月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柿

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/